

20

16/

About 2016/

日本の佐賀県にある山と森に囲まれた小さく安穏とした町、有田。

まさにこの地で、400年前に日本で初めて磁器製造が始まりました。17世紀半ば～18世紀にかけて、有田焼はオランダ東インド会社を通して盛んに輸出され、ヨーロッパの人々をも魅了しました。その後、国内需要への供給が中心に。20世紀後半に全世界的な不況が日本経済を脅かし、かつての好調だった市況は行き詰まりました。低価格の輸入陶磁器の流通、生活様式(特に食生活)の変化など、近代化の急速な流れに対応しきれなかった有田は、窯元の閉鎖が相次ぎ、現在の有田焼の生産は最盛期の1/6に減少しています。数世紀に渡って受け継がれてきた技術や伝統が存亡の危機にさらされているのです。

しかし有田は、苦境に立たされながらも、際だってクオリティの高い磁器を製造できる磁器産業の町として生き残っています。有田焼創業400年の記念すべき年、この長い歴史に新しい章が幕を開けようとしています。

2016/は新しいブランドです。有田の職人の高度な技術と、16人のデザイナーの才能が集結して生まれた磁器のコレクションです。世界の人々に向けて、新しい世代の、現代の有田焼が生まれました。2016/は、有田焼を再び価値ある望ましいものにし、復興させ、有田の産業やコミュニティに新たな目的を与えます。

2016/のコレクションの制作にあたっては、デザイナーと有田の窯元、佐賀県とオランダなど、クリエイティブなコラボレーションによって進められ、長く、やりがいのあるプロセスをたどってきました。クリエイティブ・ディレクターを柳原照弘とショルテン&バーイングスがつとめています。

2016/のコレクションは、2016年11月から世界に向けて発売の予定です。

2016/ collections



Photography: Schelkens & Abbenes

スタンダードコレクションは、世界的に活躍するデザイナーと、有田の窯元が協働し、日々の暮らしの中で使用するのにふさわしい磁器を生み出します。シリーズは、有田の窯元が持つ相当な技を証明するもので、量産され、機能的で、広く世界に向けて発信していく予定です。

2016/ ビッグゲーム

ビッグゲームの陶磁器コレクションは、久保田稔製陶所により製作され、最も先進的でハイテクな材料と有田で製作可能な過程で作られています。二種類の材料が使用され、一つは多孔質の材料で、液体をろ過するために使用できます。二つ目は、高い耐熱性を持つ材料です。ビッグゲームは、特別な多孔質の磁器をセットして実用的に使えるコーヒーセットをデザインしました。つまり、それはドリップコーヒーを作るセットで、日本ではとても一般的なものです。多孔質の磁器により濾過されたコーヒーは、柔らかな味が加味されますし、使い捨ての紙フィルターを使用する必要がなくなります。

二つ目のシリーズは、磁器製のケトルと料理用ポットを含む商品です。これらは、耐熱性のある磁器で作られており、コンロの上に直接置いて使用することや、オーブンの中や電子レンジの中で使用することができます。この容器のハンドルも耐熱性のため、容器の中に熱湯を入れている時も、快適にハンドルを握ることが出来ます。ベーシックで幾何学的なフォルムは、最先端の製陶技術を使用して作られており、特別な釉薬は、窯元ならではの技術を用いて開発されました。

2016/ クリスチャン・ハース

クリスチャン・ハースの作品は、常に日本文化や日本美学に影響を受けています。特に、このコレクションについては、質素さと複雑さを結合する日本の特徴に発想を得ました。このシリーズはテーブルセッティングにおけるアジアの様式とヨーロッパの様式を比較研究するところから始まり、その両方においてうまく機能するような形とサイズの容器を定義しました。お皿、ボウルや碗のコレクションは、全て多機能な用途で使えます。ハースはこのコレクションを、日々使うためには控えめで利用しやすいものであること、そしてその美しさは予期せぬ幾何学上の繊細さの中に見出されること、と定義しました。

ハースのコレクションには、追加的な装飾の要素があります。それぞれの器の底に、記号化されたシンボルがマークされています。この隠れた部分は、使う人の楽しみのためであり、ひっそりと、ユニークな装飾の形です。ハースは、宝泉窯と共に開発を進めながら、伝統的な製陶技術に革命を起こしました。一つの重要な要素は、スタンド、もしくは高台の部分でした。宝泉窯は、一般的な食器に必要とされるものである高台を取り除く技術を開発しました。ハースのお皿や碗は丸い形状ですが、柔らかく彫刻されてできた点によって器が自立します。

2016/ クリスチャン・メンデルツマ

16世紀、オランダの商人たちは、船や徒歩で長い旅をして、日本の将軍を訪問するために「hofreizen」を作りました。

彼らはオランダのリネン生地を特別な贈り物として将軍に献上する代わりに、珍重な磁器をオランダに持ち帰りました。有田の磁器とオランダのテーブルリネンは、この時代の絵画の中で一緒に描かれています。クリスチャン・メンデルツマは、インスピレーションとして、(磁器とリネンという)珍しい組み合わせを用いています。彼女は、リネン生地を使用して、コップ、皿やボウルの形状をモデル化し、磁器へと翻訳しています。

メンデルツマのコレクションの進化形として、パートナーである藤巻製陶と共に、2016/コレクションを制作する窯元たちから廃棄する磁器材料を集め、それらを使用した特殊な釉薬を開発しました。斑点のある釉薬は有田の窯の集いを祝う「紙吹雪」のようです。

2016/ インゲヤード・ローマン

インゲヤード・ローマンは香蘭社と組み、これ以上ないほど機能的にスタッキングができるティーセットを作りました。スタッキングをすると、個々の器に新たな効用が生まれます。たとえば、お茶が温かく保たれたり、棚の中にすっきりまとめることができるといった具合に。機能的であると同時に、積み重ねた時の姿がとても美しいのです。

ローマンが使用しているピロードのようになめらかな黒の釉薬は、こつこつと注意深くこの商品のために特別に開発されたものです。どんよりと鈍く見えた

2016/ collections

り、灰色っぽくならないように作られました。マットの白の釉薬もまた、このコレクション用に開発されました。

このコレクションは、デザイナーと職人による真のコラボレーションによって生み出され、最後まで妥協をせずに仕上げることで完成したのです、とイングヤードは語っています。セラミック製造に関するラーマンの広い経験は香蘭社の技術にぴたりと調和し、彼らは工芸に対する知識をつなぎ、高度な生産技術が妥協することない仕上がった磁器のコレクションへと結実しました。

2016/ カースティ・ヴァン・ノート

カースティ・ヴァン・ノートは、有田の磁器製造に使用される原料を探索しました。彼女は有名な有田磁器の陶土を収集、処理している採石場や工場を訪問。有田とその周辺から採取された陶石は、特に純粋であり、廃棄物をほんの少しの量しか残さないことが判明しました。しかし、これらの少しの鉱物廃棄物はヴァンノートと瀬兵衛にとっては十分な材料で、この材料から彼らは有田独特の7色の新色と1つの新しい陶土を開発しました。ヴァンノートと同様、瀬兵衛はマテリアル調査のスペシャリストなのです。通常の製造時に出る余った材料を組み込み作られた新色と陶土は、完全に単一の原料から作られる食器となりました。ノートが開発した新しい陶土は、カオリンと黒の天草石の混合物です。通常、白い天草石は有田磁器の製造に使用され、黒いものは破棄されます。独特のカラーパレットを強調するよう、コレクションの2つのシリーズはベーシックな形状で構成されています。7色の新しい顔料を使用したものと、新しい陶土から作られているグレーのシリーズの展開です。

2016/ クーン・カプート

クーン・カプートは、組んだ職人と彼女らの技術を最大の形で示そうと試みしました。有田の磁器生産は機械化されていると見られがちですが、現実には多くの工程に手作業や細やかな注意を要する段階を含んでいます。フラワーベースとボウルによるこのシリーズは、錦右衛門陶苑の職人の得意とする「吹付」と呼ばれるエアブラシで色付けする特別な技術を用いて作ります。この技術は、磁器の表面に塗ることで柔らかな色のグラデーションとテクスチャーを可能にします。クーン・カプートと錦右衛門陶苑は、光と影の戯れによって、見ている人にその物の端の部分がどこかを疑わせて視覚的な錯覚を創り出そうと、表面の塗装方法を開発しました。

2016/ レオン・ランスマイヤー

今回の研究でランスマイヤーは、当然のことかもしれませんが、日本の磁器は触り心地が良いということをよく理解してきました。触りたくなる形に注意しつつ、心地よさと機能の関係を反映させるための技術のアイデアも導入したいとランスマイヤーは考えていました。道具とは、繰り返しの強い力や動きで使われるもののため、持ちやすいデザインが必要です。ランスマイヤーの2016/のコレクションの取っ手は、ノコギリやカンナの文脈から生まれたものです。コーヒーマットの取っ手は注ぎやすい角度に設定されています。ティーポット、花瓶、コップは、手によくフィットするためにポリウレタンのある取っ手にしました。本体に接着した取っ手と注ぎ口は圧力鋳込みの技術をよく表現しています。表面には釉薬をかけていません。土に直接触れているような柔らかい触り心地を楽しめるようになっています。ランスマイヤーは今回、畑萬陶苑と共にコレクションの開発を進めてきました。釉薬をかけていなくても、高度なガラス質の天草陶土を使っているので、仕上がりがガラスのようで表面は汚れにくくなっています。

2016/ ポーリーン・デルトゥア

有田特有の、とても印象深い製造技術がポーリーン・デルトゥアのコレクションにインスピレーションを与えました。幸右衛門窯は、底は厚く、上部は薄いエッジという厚みの異なる器を量産できます。このプロセスはとても高い技術と、長時間の焼成、特別な土を必要とします。試してみてもたいはいは、ひびがはいったり壊れたりします。伝統的な日本のボウルには、ほぼすべてに高台がついています。この要素をコレクションのエレメントとして残すことで、アイデンティティや見た目の一貫性、安定性をコレクションにもたらしめています。

デルトゥアは、自身のコレクションのために、形とプロポーション、容量と扱い方における適切なバランスを探ろうと、アジアとヨーロッパの日々の生活で使われるカップやお皿の類型論を学びました。ダークブルー、煉瓦色、青磁など伝統的な日本の磁器から見つけた釉薬の色が、デルトゥアによって新鮮な方法で用いられています。

2016/ サスキア・ディーツ

ジュエリーデザイナーのサスキア・ディーツは彼女のコレクションの出発点として、日本でよく使われているモチーフ、鱗を用いました。鱗は、龍、鯉、魚やヘビに見られ、日本文化でおなじみのシンボルです。同様に、このシンプルな形は、波、または蓮の花の花びらの装飾でも使われています。日本文化において、これらのシンボルはそれぞれに異なる意味を持ちます。竜は、例えば、知恵と徳。鯉は、決意、勇気、そして成功を意味します。ヘビは、幸運と変化の象徴であり、水は動き、流動性と命を意味します。日本には象徴的な装飾やモチーフについては強い伝統がある一方で、ジュエリー作りに関しては特に豊かな遺産がないと、彼女は指摘しています。ディーツは、磁器で作られた「第二の皮膚」になるような鱗のアイデアからコレクションを展開しています。熟練した絵付けの技術を持つ畑萬陶苑と、プレスレット、指輪やペンダントを開発しました。ジュエリーは、どれもとてもシンプルに絵付けが施されていて、新鮮で現代的なだけでなく、畑萬陶苑が持つ特別な技を取り入れています。

2016/ 藤城 成貴

一般的な有田焼の色といえば、「白地に藍」かもしれませんが。しかし、デザイナーの藤城成貴は有田焼の一般的なスタイルを探求し、赤い色の優位性を発見しました。有田では上絵付けのことを赤絵と呼び、この名前は中国を源にしています。また、赤は日本を象徴する色であり、藤城はこれを自身のコレクションの中心とすることにしました。藤城は錦右衛門陶苑とコラボレーションしました。彼らは、機能性を強調し、東洋、そして西洋の食卓のいずれにも調和する形状で日々使えるツールを作り上げました。マットの釉薬に赤の顔料を混ぜ込み作ったこの特別な赤色。一度釉薬掛けをした後、同じ釉薬を錦右衛門の得意とするエアブラシで更に吹き付けて仕上げています。

2016/ ステファン・ディーツ

これは使いやすくありながら、食の東洋の文化のバランスを考えた日々のテーブルウェアとして他にはないコレクションです。磁器産業は、世界共通になるよう細部の開発をしてきたことで、効率的な生産過程を生み出しました。ディーツはこういった当然とされている要素を排除。食器の高台や従来のプレート縁を取り除いて、磁器をもっと手元に近づけて置けるような形状のシリーズを開発する中で、使用する人に柔らかい形の精密さと巧妙さを感じてもらおうとしました。たとえばハンドルなど細部について言うと、大きなカーブの形状と非常にデリケートで薄いボディがコントラストを生み、アイコンとなるキャラクター性をもたらします。ディーツは、デザインをする上で、川副青山が地元の職人たちの強いネットワークのおかげでできる代表的なクラフトのディテールを採用し、生産のプロセスに取り込みました。茶漉しの穴は、'瑩手'(磁器に小さな穴を開けてその上に透明な釉薬をかけて焼き上げる有田焼に特徴的な技術)と同じ工程で穴を開けており、このような技術は排泥鋳造成形など工業的な工程と結合して用いられます。

2016/ スタジオ・ウィキ・ソマーズ

スタジオ・ウィキ・ソマーズは香蘭社と組み、伝統的なクラフトと革新的な技術を組み合わせによって2つのティーセットを作りました。このティーセットは、この窯を特徴づけその名を世に知らしめている、香蘭社のアイコンとも言える瑠璃地を全面に打ち出しています。描かれているパターンは、メタルのワイヤーで作ったテンプレートを用いて磁器の表面に直接スプレーをするという、香蘭社で古くから行われていたステンシルの技法に発想を得ました。パターンのプロセスを明かし、それによってクラフトを世に知らしめつつ、ウィキのスタジオはこの技術に順応し、抽象化

2016/ collections

していきました。

伝統的なメタルのステンシルはカップの取っ手やティーポットのふたなど、商品の機能的なパーツの部分へと置き換えられました。プロセスの中で、驚くべきパターンが現れました。それは、日本でもっとも象徴的なシンボルの一つとしている月でした。

2016/ タフ

タフは、日々使える磁器コレクションをデザインしました。彼らは、大人にも子どもにも機能するコレクション、という考えに焦点を当てました。たとえば、子どもにとっての皿が、大人にはサイドプレートになる、というようなことです。結果、子どもでも大人でも使えるもの、一つの使い方に限らないもの、アジアもヨーロッパもどちらのテーブルセッティングにも使用できるものといった具合に、どのアイテムも二つの機能を持つものになりました。コレクションは徳永製陶と作られ、遊び心のある要素を持っています。形状のいくつかは液体がテーブルにこぼれたようになっていたり、幾何学的なデザインは、無邪気さがあります。ボールペンで描いた時のラインに似せていますが、実際のところは、有田で400年に渡って使われてきた青の絵の具を使用して作っています。それぞれのアイテムの形は、キャンティーンカップやインダストリアルなピッチャーなどから発想を得ています。

2016/ 柳原照弘

このスタンダードなテーブルウェアは、スタッキングが可能で、シンプルで、世界の日常に使えるスタンダードなシリーズです。有田のベーシックな白がありますが特別なグレーとダークグレーの釉薬が用いられています。でしゃばらず、本質的で、どんなインテリアにでも溶け込む、毎日使う道具としてのテーブルウェアです。

柳原は、1775年から続く窯元である藤巻製陶と実験的な釉薬を開発しました。磁器の製造工程の中で失敗した釉薬の現象をヒントに均質でないテクスチャを作り出しました。

日本では古くから、不完全なものにこそ美が宿り、美しさを感じるという思想があります。柳原はそこからインスピレーションを受け、有田ではこれまでは失敗としていた、くぼみのある均一でない不完全な釉薬の仕上がりをあえて特徴とするテーブルウェアを作りました。

2016/ トマス・アロンソ

トマス・アロンソのコレクションは、ベーシックな幾何学、色、サイズのコンテナからなるシリーズです。それらは、決められた機能があるのではなく、異なるコンテキスト、異なるアレンジによって機能は自在です。アロンソは、この容器の使い方を持ち主に一任しています。デスクではデスク上を整理するアイテムとして、または装飾用のアイテムとして、もしくは、ダイニングテーブルで食べ物を提供するのための器として、どれにもぴったりのプロポーションやサイズです。トマスは自身のリサーチの中で、日本では食べ物をどう見せるかと言う点に特別に重きを置いていると記しています。

このコレクションは、有田でも非常にクオリティの高い型作りの技と、正確な焼成の技術を用いて作られています。

アロンソのコレクションは基本的な形のようにですが、実はとりわけ仕上げるのが難しい形をしています。薄く、強く、幾何学的な形をはっきりと出せるように有田で開発された特別な土を使っています。アロンソが取り組んだのは瀬兵窯。これらの難しいフォルムを作り上げ、新しい技術を用いて伝統的な釉薬の代わりに土に顔料を直接混ぜ込み、カラー展開を進めました。

EDITIONS

2016/のエディションは、有田焼の優れた素晴らしい技術の表現そのものです。今回制作された限定のシリーズは、有田の窯元の能力とずば抜けた知識の豊かさを証明し、世に知らせることを意図してデザインされています。かつて、情熱的な磁器収集家は、最も素晴らしい有田焼を探し出そうとしたものでした。希少性があり、並外れたアイテムを製作することによって、有田焼に対する評価が再燃し、有田の価値ある技術が保持されていくことを2016/は期待しています。

2016/ ショルテン&バーイングス

27種類のお皿からなるシリーズで、ショルテン&バーイングスは有田焼の400年の美を世に知らしめ、伝統的な有田焼がいかにコンテンポラリーデザインに対して豊富なインスピレーションを与えるかを証明しています。有田の絵付けの傑出した例を探索しながら、彼らは何百もの有田焼をよく調べ、信じられないほど洗練された数え切れない技術に出くわしました。

それぞれのお皿は、畑萬陶苑の熟練した職人により丁寧に手描きで製作されています。この精妙な手描きは、畑萬陶苑の持つ特別に素晴らしい才能であり、有田特有のものです。ショルテン&バーイングスは、この独特の技術を世の中に知らせるのではなく、慣習であるように認識できるイメージを使用することにしました。ショルテン&バーイングスは伝統的なモチーフを抽象化したものを柄に適用しました。

ショルテン&バーイングスは、有田の歴史的な磁器コレクションについて学び、本や美術館、そしてタグを組んでいる畑萬陶苑の記録や古文書を調べ、有田焼の素晴らしい手描きの実例を書き留めました。この製作過程によって、長く忘れ去られていた技術が再発見され、最終的に作品として蘇ったのです。デザイナーたちは、選んだ例を再構築し、それらを一つの要素まで落とし込みました。形、色、そして技術のパレットを用いてイメージを切り取り、抽出し、それから再構成しました。

すべてのお皿は、実際にあった歴史的な形が原点になっています。

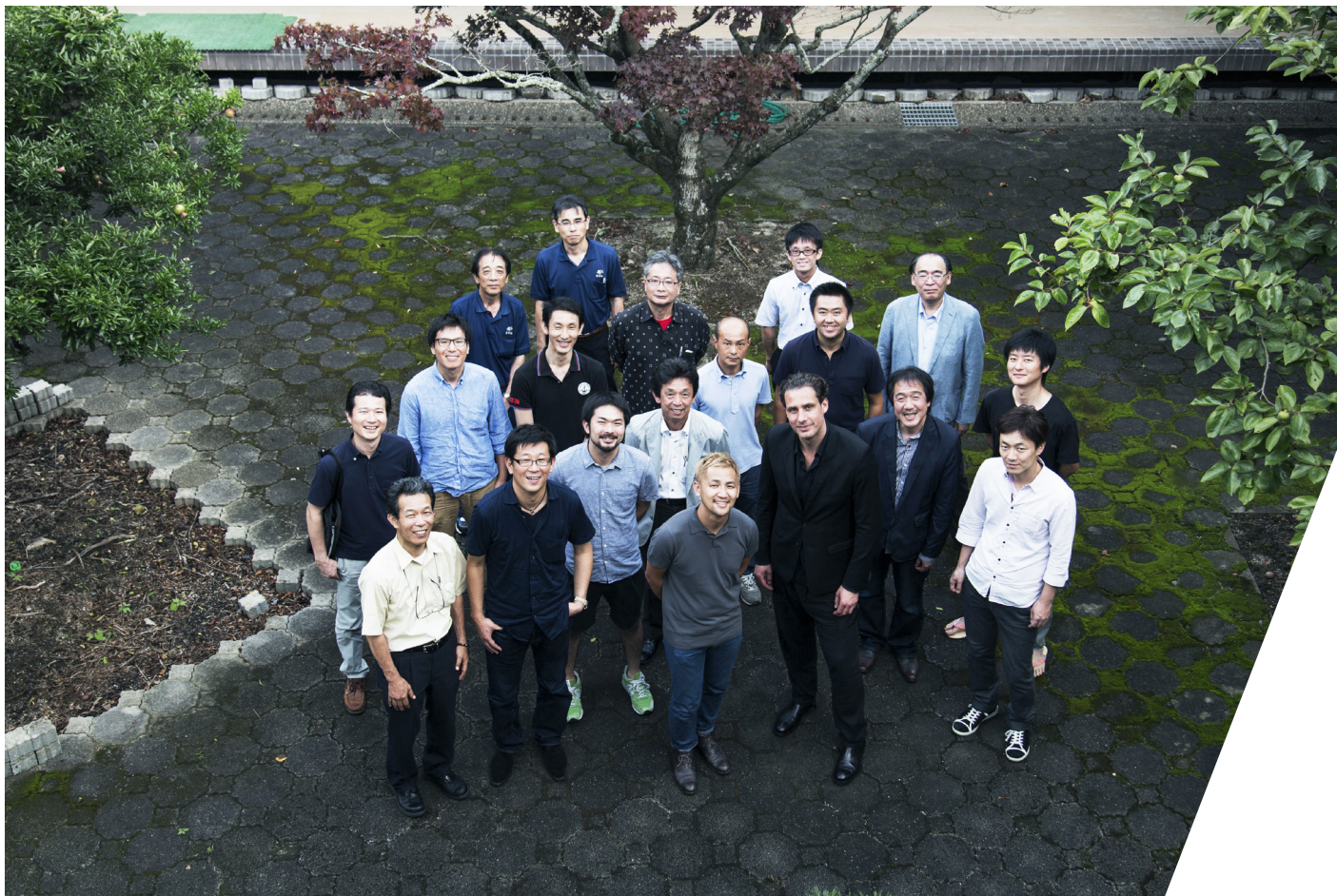
歴史的なお皿の形状を、2つ、または3つのアウトラインを重ねると、複雑な新しい形が現れました。そしてこれは、最新の技術の力があってこそ可能だったことです。この複雑な形状は、佐賀県窯業技術センターの3Dプリンターと5 Axis CNCミリング設備のサポートがあって制作を可能にしました。

2016/ 柳原 照弘

有田の伝統的な八角の花瓶のと真っ直ぐに伸びたフォルムを持つ円筒のこの陶磁器は、実際のところ実用的なものではありません。多孔性の磁器でできていて、この中に水を溜めることはできません。これは、鑑賞するためのもの、意図的に作った無用なものと柳原は言います。どちらかと言えばこのベースには、現在の有田で可能な最新のハイテク素材や製造方法を探索するという目的があります。最も革新的で科学的にも高度な方法によって、何世紀にも渡る技術が実践されてきたというのが、この町の注目すべき特徴です。柳原は、佐賀県立窯業技術センターで研究者と共に強い土と成型方法を開発してきました。アルミナをベースとした土が使われています。ベースの型はプラスチックのスポンジから作られていて、藤巻製陶が製造、グラデーションが繊細な釉薬の吹きつけは錦右衛門窯で担当しています。これは世界で最少の構造を持った陶磁器であると言えます。

それぞれ限定30セットの販売となります。

2016 Corporation



Photography: Kentia Hasegawa

有田には200もの商社がありますが、これまでは、各窯元が製造した商品を各商社が独自にマーケットを開拓し磁器の販売を行ってきました。有田ではこれまで長い間、商社間や窯元間など企業同士の連携はほとんどありませんでした。しかし、今回立ち上がった新しいブランド2016/では、このような企業間の関係性から考え直しました。世界に向けて2016/をプロモートし、流通させるために、2016株式会社（ニーゼロイチロク株式会社）を設立。有田の8つの商社と窯元がいわば同盟関係を結び、一つの会社組織を立ち上げたのです。

この会社が目指すのは2016/ブランドの流通に留まらず、有田焼産業自体の復興とイノベーションの継続です。世界に有田焼の技術を打ち出すために、2016株式会社は、ここ数年間で実績を作り始めている海外ブランドへの有田の技術による磁器の製造・提供を、今後さらに積極的に進めます。2016/のコレクションは2016年11月頃の発売を予定しています。

2016株式会社参加会社

百田憲由(株式会社百田陶園)、篠原文也(株式会社まるぶん)、山本幸三(株式会社山忠)、深川祐次(株式会社香蘭社)、深海靖(株式会社深海三龍堂)、田澤尊(株式会社藍土)、山口雅巳(ヤマト陶磁器株式会社)、原田元(有限会社宝泉窯)

2016株式会社

〒844-0024

佐賀県西松浦郡有田町赤坂有田焼卸団地

Tel 0955-42-2016

contact@2016arita.com

Creative Platform in Arita

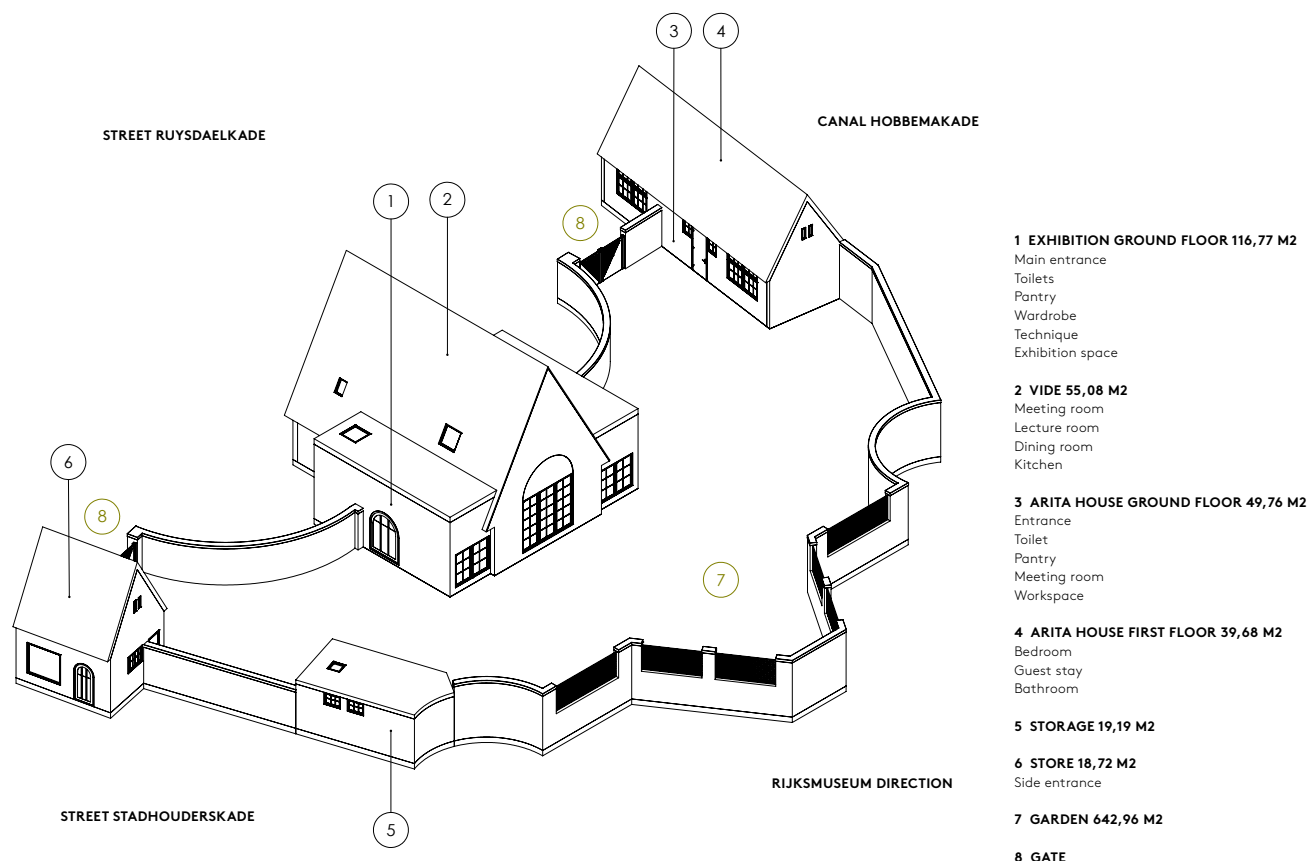
佐賀県は、有田の近い将来の姿として、ものづくりのプラットフォームを目指し、世界のクリエイターが訪れたいと願う町にしたいと考えています。プラットフォームでは、ワークショップ、エキシビション、レクチャーやレジデンスプログラムなどを企画し、国内だけでなく海外からのアーティストやデザイナーとの積極的な交流の場にしたいと考えています。

2016年6月～11月には、本格的にアーティストインレジデンスが始動します。オランダから二組のアーティストとデザイナーが有田に滞在し、窯元とコラボレーションをして制作を行います。有田には世界的に見てもハイスペックな

設備が整った佐賀県立窯業技術センターがあり、このセンターがテクニカル面のサポートを行います。

2016/によって開かれた道を頼りにクリエイティブなプラットフォームを築いていきます。世界とつながりつつ、デザインとものづくりが交わるプラットフォームの整備を進めて行きます。このプラットフォームが確立したら、有田の磁器産業内にさらなる探求、交流、そしてコラボレーションを生むための活動の中核を担っていくことになるでしょう。

Arita House Amsterdam



アリタハウスはアムステルダムのアムステルダム国立美術館に隣接した1925年に建てられた歴史的建造物です。645㎡ある土地に、いくつかの建物があります。

アリタハウスの目的は、佐賀県とオランダが協力をして、日本とオランダ間で行われてきた他に見ない歴史的な交流にさらなる息吹を吹き込むことです。日本とオランダの現代文化の架け橋となり、その文化を促進します。この新しいランドマークは、2016年5月14日から2016年12月末まで公開されます。

アリタハウス アムステルダムでは、2016/のコレクションの展示や販売を行います。実際に見て、使っていただきながら、製造プロセスや、デザイナーがどのように日本の伝統工芸や文化遺産に発想を得たかなど、背景も含めて興味を持っていただけるコンテンツを用意しています。ディスカッション、レクチャー、ワークショップや茶道のプログラムも用意しています。また、佐賀県は、窯業とともに農業や漁業も盛んな県。“Shop/Shop”では有田焼だけでなく佐賀県の特産品も並びます。

アリタハウスの庭は、ガーデンとランドスケープのデザイナーとしてオランダで最も有名なPiet Oudolfがデザインをしました。

主催: 佐賀県

共同主催: Creative Industries Fund NL (Stimuleringsfonds Creatieve Industrie)、DutchCulture、アムステルダム市、Mondriaan Fund、日本大使館、S&B2 Design Management

協賛・協力: Agape、Auping、Bardelli、Deltavormgroep、Duikelman、Erco、Farrow & Ball、Forbo Flooring、Gelderland、Georg Jensen、HAY、J. HILL's Standard、Karimoku New Standard、JVC、Luce di Carrara、Maharam、Moooi、Moroso、Muuto、Nikon、Samsung、Stadsherstel、Skagerak、Skyline Design、Subzero-Wolf、Verreum、Vitra

ARITA HOUSE AMSTERDAM

Exhibition '2016/ collections' & SHOP/SHOP

Opening Hours

Thursday – Saturday
10.00 – 18.00

Location

Ruysdaelkade 2 – 4
1072 AG Amsterdam
The Netherlands

aritahouseamsterdam.com

info@aritahouseamsterdam.com

2016/ Movie

2016/は美術家であり映画監督として国際的に活躍する藤井光を招き、2016/のショートフィルムを制作しました。本作は、ミラノサローネ2016にて初めて公開され、その後はアムステルダムに新しくオープンするアリタハウスアムステルダムなど2016/が行うさまざまなエキシビションなどで公開していきます。

藤井光 École des Arts Décoratifs(パリ)、Université de Paris(パリ)で学ぶ。ビジュアルアートと映画の分野で作品を発表している。近年では、現代の日本の社会政治状況を題材に表現活動を行っている。彼の映像作品「ASAHIZA」「Project Fukushima」は、国内外で高い評価を得ている。

Arita / Table of Contents Studies in Japanese Porcelain

日本の磁器製造は1616年に有田で始まりました。創業400年の今年、「Arita / Table of Contents」では、16組の現代のデザイナーと10の窯元により、非常にオリジナリティがあり、革新的で、21世紀の日常に根ざして作られたコンテンポラリーな16の磁器コレクションとして生まれたユニークなコラボレーションを、歴史などを踏まえ系統立てて書き記しています。

ビジュアルとして魅力的で、クリエイティビティとデザインにおける非常に興味深い研究で、古いクラフトを現代に解釈しています。地図やイラストレーション、12のキーとなる歴史的な物事がクラフトと地域について包括的に紹介しています。同時に、それぞれのデザイナーがたどったプロセス、インスピレーション、影響、ドローイング、型、製造されるまでの写真など、500以上の制作活動におけるドキュメントがあります。

日本のデザインのエッセンスや日本のスタイルである Wa といった強度のあるタイトルに基づいて、「Arita / Table of Contents」は日本にインスパイアされて出版している今成長中のファイドンのコレクションに最新のものとして加わります。

2016/と共に、有田の磁器づくりの歴史に新たな章を記します。

出版元: Phaidon Press - London/New York

Contact & Acknowledgements

PRESS (Japan)
Daily Press 竹形尚子
153-0042 東京都目黒区青葉台3-5-33
川邊ハイツ1F
Tel +81.3.6416.3201 Fax +81.3.6416.3202
naotakegata@dailypress.org

PRESS (Outside Japan)
Scholten & Baijings, Yildith Della Coletta
Westerdoksdiik 597, 1013 BX Amsterdam, The Netherlands
Tel +31.20.4208940 Fax +31.20.4208941
yildith@scholtenbaijings.com

SALES
2016株式会社 篠原拓也
844-0024 佐賀県西松浦郡有田町赤坂有田焼卸団地
Tel +81.955.42.2016
contact@2016arita.com

ARITA HOUSE AMSTERDAM
Exhibition '2016/ collections' & SHOP/SHOP, Japanese tableware and more
Ruysdaelkade 2-4, 1072 AG Amsterdam, The Netherlands
Thursday - Saturday 10:00 - 18:00
aritahouseamsterdam.com
info@aritahouseamsterdam.com

発足時より2016/projectは、共通の目的を達成するために様々な人々、異なる規則や文化、ビジネスの集積を促進してきました。

私たちは、日本とオランダのスポンサーの方々から多くの支援をして頂いたことにとても感謝しています。多大なる援助と貢献のおかげで、2016/というプロジェクトは実現しています。感謝の意を表します。

主催: 佐賀県
共同主催: オランダ王国大使館

協力: 有田町、アムステルダム市、Dutch Culture、Creative Industries Fund NL & Mondriaan Fund and Rijksmuseum

後援: Agape、Auping、Bardelli、Deltavormgroep、Duikelman、Erco、Farrow & Ball、Forbo Flooring、Gelderland、Georg Jensen、HAY、J. HILL's Standard、Karimoku New Standard、JVC、Luce di Carrara、Maharam、Moooi、Moroso、Muuto、Nikon、Samsung、StadsHerstel、Skagerak、Skyline Design、Subzero-Wolf、Verreum、Vitra

2016arita.com

 佐賀県
http://www.pref.saga.lg.jp/

ARITA
EPISODE 2
BY SAGA PREFECTURE

 Kingdom of the Netherlands